

## 新しい型の政治家の先駆者

黄田多喜夫

昭和三十九年大平さんが外務大臣の時、私は次官をしていた。大臣室と次官室は秘書官室を挟んで続いていたので、連絡往来は頻繁であった。

外交案件で他の関係官庁との調整を要するものや、総理大臣の耳に入れ総理の決裁を要すと認められた案件では、大平さんは直ちに電話で当時の池田総理に連絡してその指示や承諾を取られたので、大変有難かった。

私は次官になる前にインドネシアで大使を四年二カ月もやりスカルノ大統領とは大変親しかったので、大平さんはなんべんも私にスカルノさんとはどんな人かという質問をされた。

大磯の吉田さんもしばしば同じ質問をされた。吉田さんは李承晩とスカルノと河野一郎が大嫌いと言われていたが、私が質問に答えてスカルノさんを褒めあげると、あまりいい顔はされなかった。ポゴールで吉田さんがスカルノさんと会われた時、如何でしたかと尋ねたら、一目見た時いやになったよといわれた。その後二度目の会見があった時、今度はどうでしたかと聞いたら、ますますいやになったとのことであった。

大平さんの同じ質問に、私は同じ回答をして、あれだけ雄弁でカリスマチックな政治家は日本にはいないと答えたが、大平さんからは、そうだろうねえ、という短評だけで、吉田さんほどのハッキリした反応はなかった。

吉田さんが昭和三十六年にインドネシアにこられた時、即ちスカルノさんと第一回の会見があり一目見ていやになった時、しかも会見があったあと二人きりの自動車のなかで、「黄田君、君十年インドネシアの大使をやっ

てくれんかねえ、これからの日本は池田君と佐藤君と交互に総理大臣をやってもらいたいと思ってるが、君は一年のうち半分は日本にいて国内情勢をよく見、あとの半分をインドネシアにいてスカルノに日本の情勢を伝え、アジアにおいて好ましからざる情勢が起らぬよう努力してほしい」といわれたことがある。

やれやれこの暑い国にもつ六年もいなければならぬのかと思つたことだったが、これは沙汰やみになつてしまつた。吉田さんが誰にも提議されなかつたのか、提案されて反対があつたのか、大平さんが関係あるのかわからない、一向に分からない。

大平さんが読書家であつたことはよく知られている。私も外務省をやめてからは一日中家にいて本ばかり読んでいたが、大平さんがニューヨークに行かれた時、私がニューヨークへしきりに本を注文していることが分かつたらしく、その後二回ほど、「本を読んでるんなら、それを自分だけで死蔵しないでレジユメでもよいから教えろよ」といわれたことがある。

最近読んだ本で面白かつたのは何かといわれて、アーサー・ゴッドフレアの『テリトリアル・インベスティグ』の名をあげたところ、その後の大平さんの講演のなかでヤーヌスのことに言及したり、同書のことを引用されたりしているので、ハハア早速お読みになつたかと感心したことであつた。

新しい時代は新しい政治家を必要とするのは当然であるが、大平さんは新しい型の政治家の先駆者というべきではないかと思う。ご自身もそれを充分意識して、そうなるべく努められたのであろう。

(元外務次官)